浦島太郎の時間感覚

近藤良樹

1. 浦島と山幸

昔話で時間の異常さを語っている話といえば、われわれでは、なんといっても「浦島太郎」の話であろう。竜宮城(異世界)へいって、わずかの期間いただけのはずなのに、かえってみたら何百年もたっていた。このことに気づき、竜宮からもらって帰っていた玉手箱をあけてたちまち白髪の老人になったという話である。

現実にも似た体験をすることがある。よく「今浦島」と称されるのが、それである。たとえば、孤島や山中深くに孤立して社会から隔絶して生き延びていたものが何年かしてもとの社会にもどったとき、いわれる。その隔絶の間は、社会的な時間は停止状態にあり、故郷の記憶は隔絶時のままにとどまっていて、突然、何年かすぎた後の時をきざんでいる社会に舞い戻るのである。かれのこころのうちにある故郷は、昨日までは寒村だったのに、今日は華やかな町にと飛躍する。第二次大戦が終わって後、南方の孤島・山中にとどまっていて長い年月をへてやっと帰国した「横井さん」や「小野田さん」は、「今浦島」の体験をしたのである。

どこかへ長いあいだ旅に出ていて、何年かして故郷に帰ったとき、浦島のように、時間的に異常なものを体験することは、よくある話であろう。ふるさとを旅立つときをもって、その地の時間は当人のうちでは停止した状態になる。記憶されるものは、そのときでストップするから、以後は、なにも記憶されることがなければ、時間的経過もないままになる。帰ったときには、その何年も前の記憶が直前のこと・最新のものとして、その現

在へと直結される。旅立ちのとき幼稚園児だったのに、突然その子が、一夜にして中学生となってあらわれるわけである。自分には一夜ほどのことだったのに、故郷の人々は、何年もその間に時間的な展開をしていたと感じる。故郷は、自分を疎遠にして、別の時間を勝手に展開していたのだといった感じになることであろう。

浦島太郎が時間的に異常な体験をしたという話は、そういう点からいうと、誇張されてはいるものの、遠くの世界へと長旅をしたものが故郷に帰ったときにいだく、ごく普通の異時間体験になるといってよいのではないか。あるいは、長年会わなかった者との再会とか長い間いっていなかったところへいったとき等に、ひとは、その間の時間の持続的な展開をもたないので、何年かを一足飛びに結びつけて、時間的な飛躍を感じるが、これらも一種の浦島体験だといってよいであろう。5年の長旅をして帰った本人が、昨日から今日のあいだに、突如5年もの時間を進行させていると故郷に対して感じることになるのと同じく、その故郷の人々自身も、旅から帰った当人の記憶を5年前から一足飛びに帰郷時の姿に結び付けるから、急にかれが5才歳とって現れたように感じることとなろう。

一瞬にして、白髪の老人になったというのも、主観的な体験としては、けっこうある話である。若いつもりでいたのに、老人のようなあつかいをうけてショックをうけたとか、同窓会に出てみて、まわりのものが老人ばかりであることに気づき、自分もその一員であると自覚してがっくりする等のことがある。あるいは、かつては、鏡をみる機会はあまりないから、ふと見た鏡に、「あっ、お父さんが」と思い、それが自分自身のすがただと気がついてがく然とすることもあったにちがいない。浦島のように、突然、白髪になったという心境であろう。

われわれは、浦島太郎のように、故郷に帰ってみると300年も経っていて、一瞬にして白髪になるというような時間的異常体験の話を、客観的にはまずはありえないフィクションだと思い、そういう点では荒唐無稽な話だとみなしつつも、「ばかばかしい」といいきれずに、なんとなく、これにひかれてしまう。しかも、浦島太郎のような異常な時間体験をする話は、どこの国の昔話にもあるぐらいにポピュラーでもある。主観的な体験としては、けっこう一般的でみんながもっているからであり、しかも、奇怪で大きくこころをゆさぶられた体験として、語らずにはおれない、あるいは聞かずにはおれないテーマとなってきたのではないか。

だが、同じように竜宮に行って帰った「山幸彦」では、時間の経過の異常さは存在していないようである。それは、異時間体験が、主観的なものにとどまり、客観的にいうなら錯覚でしかないことをふまえているか、実際に、そういう奇異な体験そのものをもつことがなかったということなのであろう。異世界に行っている間も故郷と音信を持ちつづけて、これを次々と新しく記憶にとどめつづけていくことになれば、故郷の時間的展開をたどりつづけることになるのであり、帰ったとき、旅立ちのときから、一足飛びに帰郷時へと飛躍することはないのである。山幸彦は、海幸彦との兄弟葛藤のなかにあって、かれから、失った釣り針をさがしてこいといわれて探しに出たのであり、見つけてもってかえることが課題となっていた。兄弟葛藤の結末はつけられていなかったのであって、帰ってからそれの結末をつける必要があった。時間的差異が浦島のように生じていたのでは、そういう肝腎のテーマがむなしいものと化すことになるから、異時間的体験はあったとしても、「主観的な錯覚」という真実にとどめられる必要があったのでもあろう。

異世界へ行ってくるというばあい、客観的には、山幸彦のようになるとしても、主観的な体験としては、その前後の隔絶がおおきいほど、浦島のような異常な時間体験をすることが少なくない。しかも、時間感覚が異常をおぼえることは、些細なことがらではなくて、世界と自己の根本にかかわるものとわれわれは感じているのである。

「むかし、あるところに・・・」とわが国近代の昔話は、時空間の定位から語りをはじめていくが（「むかし」のあとに「あるところに」を付け加えるようになったのは、意外に新しく、おそらく明治になってからのことである。このことについては、拙稿「社会認識教育と昔話－地理学習の視点からの

「あるところ」の分析」（『佐賀大学教育学部研究論文集』第37集第1号　平成元年）を参照下さい）、われわれの生の根本形式に空間とともに時間がある。その各々の一点に自分を定位して自らの存在を確かめて生きている。自分の空間的な位置が不明となったとき、ひとは、いま自分がどこにいるのかを確定しようと必死になることであろう。それは、時間的にも同じである。もし、自分の生きているその時間があやふやになったとしたら、われわれは、動転することになる。

たとえば一寝入りしたあと目覚めて、「いまは、夕方なのか朝なのか」と見当がつかなくなったとしたら、ひとは、うろたえてしまうことであろう。自分の時間的位置がはっきりするまで、存在の足場を失なったように感じて、不安になってしまうのではないか。わが国では四季の区別が明確である。そのとき、春なのか、秋なのか不明になるような体験をすると、ひとは、とまどいをおぼえることであろう。いまは秋のはずと思っているとき、ふと、小川をみていると、春の桜のはなびらがながれ、れんげ草が岸辺に咲いているのに気がついたら、秋風は急に春風と感じられてきて、自分とこの世界があいまいなものとなって、どぎまぎするのではないか。

時間は、そのもとでみんなが同じひとつの世界に存在する根本的な形式としてあって、それからはずれてしまうようなことは、その同じ世界から根本的にはずれることとして、奇怪なことがらとなるであろう。かつ、それに密着して自己の同一性も維持されているのだが、時空間的な世界の同定が崩れることで自己の存在の場はあいまいになり、自己の存在そのものがゆらいでいくように感じ、あるいは自己そのものが霧散し失われていくというような思いにとらわれるのではないか。自己の同一性は時間のなかに定位される。一年前の自分も今日の自分もずっとおなじだと、一つの持続としての時間のながれのなかで同じものとして存続していることをもって、自己の同一性は意識されている。その時間があいまいになるとしたら、自己の同一性もあいまいとなってしまう。さっきまでは秋のなかにいたのに、いまは春のなかにいるのだとしたら、時間秩序は崩壊し、時間のながれのなかで持続していた自己の同一性の確かさも揺らいでくる。秋が突然、春になっていることに驚かされる以上に、自己の同一性・自己の定位のあいまいになることに、言い知れぬ不安を感じることになるであろう。

自己のことは、ともかくも、世界の共通の根本形式である時間、これが異なってくるということは、世界を根本的に別にするということである。それは、異世界を知らせる衝撃的な手段となる。しかも、帰郷した浦島のような体験は、客観的に反省するなら錯覚であって、そんなことはないのだと理解しつつも、主観的な体験としてはけっこう一般的であるから、浦島のような異時間的表現は、ひとを魅することになるのであろう。

ところで、「浦島」と「山さちひこ」のちがいは、なんといっても成功話と失敗談のちがいである。それもまた時間の取り扱いの違いの問題にかかわりをもっているのかもしれない。つまり、成功し富みなどをもって帰郷して現実的に活躍しつづけるものと、失敗し呆然自失で帰郷して自己閉鎖し生きた屍になっているのかという違いである。

異境・異世界へと旅するのは、冒険の旅であり、試練の時なのであって、これを経ることで実りのある成果がえられるのである。故郷の我が家を出ていくのは、豊かな幸・富みを獲得しようがためである。狩りに出かけて、えものを獲得して、帰るのである。成功話であるとしたら、帰郷したときには、待ちかねていた故郷・我が家のものたちと再会して、富み・幸を共に享受できるのでなくてはならない。獲物をもって、富みをもって帰郷してみたら、我が家は廃虚となっていて、だれもいなくなっていたというのでは、成功話は、惨めな不幸な話にと転倒してしまう。鬼が島の宝物をもっての「桃太郎」の帰還は、宝物に喜ぶであろう「おじいさん、おばあさん」あればこそである。ということは、成功話としては、尋常には帰郷時に、待ち望んでいた人々とか、主人公が再会したいと思っているひとと会えるのでなくてはならない。つまりは、旅のあいだも、自分と故郷が時間的展開を同一に保って同時的な進行をしていることが求められるということになる。

これに対して、浦島のような失敗談の場合、故郷の人には、一面では会い

たいのだが、他方では合わす顔がないのであって、帰ってみたら、だれもいなくなっていたということでもよいのである。「桃太郎」は、かりに、鬼が島で敗北して命からがら逃げて帰ったのだとしたら、みんなにあわす顔がなかったことであろう。山幸彦の場合は、竜宮の豊玉姫（この名前からすると、今風にいえば大資産家の娘とかになるのであろう）を妻とし、海幸彦との戦いに使える魔法の玉を手に入れて帰郷した。だが、浦島はというと、竜宮の乙姫さまといったんは結ばれたものの結局は離婚し、かつ、玉を入れる手箱（おそらく、これは、乙姫の小物入れであり、浦島の未練がましさが感じられる）だけはもってかえったものの、むなしく帰郷したのであって、あけてみたら、中身はなかった。というか、財宝なく帰郷したことをしめすものとして、元々からっぽの玉手箱をあけさせているのである。

失敗者浦島は、故郷のひとにはあわす顔がないのである。帰郷時に感じる異時間性が、むしろ、かれには救いであったともいえる。時間的展開が同じであったら、知ったひとが当然そこには存在していることになる。浦島は、そういう人々に対して、敗残者として、ちいさくなって対面しなくてはならない。離婚しておそらく浦島は竜宮には居づらくなったのであろう。「望郷の念にかられ、ほんの一時の帰郷を願い出た」ということになっている話もあるが、乙姫さまから空の箱をわたされていることからみても、あいそをつかされたのである。飲み食いするのみの無能者ということになって竜宮を追われた浦島は、故郷に安らぎをもとめて帰ったのであろう（浦島の方にも躊躇するものがあったかもしれない。「乙姫」とは、「弟」姫、つまり歳の「おとった」姫であり、しっかりものの長女（えひめ）ではないから、単にかわいいだけの存在で、生活のことを考えると、浦島の一生つれそうことのできるような女性ではなかった可能性もある。もっとも、古くは、乙姫といわれてはおらず、亀の化身ということで「亀ひめ」（『丹後国風土記』逸文）といわれたりしていたようであるが）。その故郷がかれに安らぎの場として存在するためには、失敗を知っているもの、これをあざ笑うものがいたのでは、よくない。長旅のあとに感じる帰郷時の異時間感覚は、幸いであった。だれも知人がいなくなっているというぐらいの時間経過の誇張が好都合となっているのである。

2.『幽明録』と『搜神後記』

異時間的なものは、主観的体験としては確かにあるとしても、客観的には錯覚にとどまるのだとすると、昔話・説話の伝承者の資質のちがいによって、これが誇張され際立たせて取り上げられるばあいと、客観性を尊んで、異時間的なものを捨象するばあいとがでてくることになる。

異時間体験を際立たせる方の話として、例えば、中国の話で、『幽明録』に採録されているものに「天台の神女」といわれているのがある。二人の男が深山にはいりこんで道に迷い何日もさまよっていたところ、ある谷間で二人の女性に出会い、彼女たちの住む桃源郷のようなところに行った。そこで半年ほど楽しく暮らすことになった。やがて、故郷にかえりたくなって、山を下って帰ってみたら、親戚も知人もなくなっていて、自分たちの七代後の子孫に出合うことになった。その後二人は、家をでて行方不明になったというような話である。

これに類似した話を陶潜の『搜神後記』は、「巻一」にいくつかあげている。しかし、いずれも、浦島的なかたちの時間的異常性については、これを述べることがない。山中の大きな穴におちたものが十日あまりこの穴のなかを進んで行くと、明るくなり、二人の人間の囲碁をしているところへ出て、それからまた半年ばかり行って、遠くの国へでたという。が、そこでは異常な時間性の存在は言われていない。また別の話では、『幽明録』のように、山中の洞穴を抜け出て女性に出合い、帰り際には、浦島のようにみやげにと袋をもらったという。浦島同様に、けっして「開けることなかれ」といわれてもって帰ったのだが、これを家人があけてしまった。なかには、小鳥がはいっていて飛んで逃げた。その後、主人公が田のなかで不動になっているのが見られ、蝉の脱け殻のようになっていたという。

異時間を言う話のなかでは、こういう場合、二日家をあけていただけなの

に30年も経っていたとか、着ていた服がぼろぼろになり、白髪になり、老人になったり、当人が灰となって崩れ、消えてしまうというように時間経過の奇異で急激な、いわゆる浦島的展開を述べることになるのだが、陶潜は、そういうような時間的な異常さにはふれることがない。

これらのなかで一番『捜神後記』で有名なのが、「桃花源記」である。桃の花のさきほこる渓谷をさかのぼって、山中の洞窟にはいり、そのさきに別世界を、つまりはのどかな桃源郷を見いだした。そこの住人は、秦の時代に世を避けてこの桃源郷に住みつき隔絶して、漢、魏、晋の時代を知ることなく平和に暮らしているのだった。数日そこにいて帰った。再び行こうとしたが、わからなくなっていたという話である。もちろん、ここにも、行き来に際しての時間的な異常さは、言われることがない。

『幽明録』の「天台の神女」と同様の異世界へ迷い込んだ話になるはずであるが、陶潜の『捜神後記』「巻一」は、いずれの話も『幽明録』の「七代後」などというような時間的異常さは、いうことがないのである。浦島のように、別世界にとしばらくは離れて、そののちに帰郷したのであれば、各話の体験者自体においては、おそらくは、時間異常が体験されたはずであろうが、それは、陶潜からいうと、主観的なもの、錯覚にすぎず、そういうたわけた体験など述べる価値がないということだったのであろう。

大切なのは、おそらくは広い中国の大地のどこかには実在しているはずの、深い山中の別天地へと、たまたま迷いこんでしまったこと、そういう世界を垣間見ることができたという、珍奇な話を記録することだったのであろう。そのことの客観的な叙述にとっては、主観的な時間的錯覚などを採用することは、マイナスでしかないということになったのではないか。

ここには、陶潜というひとの好み・価値観がかかわるのであろう。空間とちがって、主観的な時間はたよりにならない。そんなあいまいな時間などとるに足りないと、『捜神後記』「巻一」は考えていたのではないか。時間よりも空間重視の立場である。かれの叙述では、山中の「穴」や「口」、洞窟を通してその向こうに別世界があるということになっている。なにより、空間的に異世界を定位するのである。時間的なものは、もともと主観的で捉えようのないところがあり、ひとによっては、時間は、先後が逆転さえする。自分の時間感覚が狂っていて、「橋が落ちた」のは昨日なのに、明日のことと時間定位した場合、「明日、橋が落ちる」ことが明々白々だと思え、「自分には予言が出来る」と確信することが可能である。時間感覚は、客観的には不確かで信頼しにくいところがあるのである。あるいは、大正5年と時間的に定位したとしても、これの支配下にないものには、通用しない。「飛鳥の川原の板葺の宮に宇御めたまひし天皇のみ世の癸卯の年の春の三月の頃」の「丹後国加作郡の山里」のある奇怪な事件といっても、庶民のなかでこれが伝承されていくときには、一律に過去一般になって、「むかし」「丹後の国の山里で」となっていく。時間的なものは、あいまいでとらえどころがないのである。空間的なかたちで、深山の長い洞窟の向こうにとはっきり別世界が確定できるのであれば、仮に伝承されているものには異時間的なものがいわれていても、信ずるにたりないものとして、はぶかれてよいということになったのであろう。

もうひとつは、陶潜の『捜神後記』の場合、別のかたちで異時間性が、空間的な世界のなかにすでに存在していることもかかわってこよう。つまり、「桃源郷」では、晋という現代のなかに、秦の昔がそっくりのこっていたはずなのである。そこにと世を避け隔絶して生活していたひとびとは、秦のむかしのままにとどまっていて、そのあとの漢とか魏、晋の時代を知らなかったのである。ひとつの孤立した現実の空間のもとに、ふるい時代の生活様式がいわば化石化して存在していたのである。

これは、現代ではすくなくなったが、まだときには可能な異時間体験である。なつかしい明治・大正の時代の生活をしている国々があるのを見て感激したりすることがある。かつては、都を一歩あとにすると、そうとうに古い時代（の生活）が見いだされ、「桃源郷」ならずとも、地方にいけば、新時代には無縁の過去の時代（の生活）がみちみちていたはずである。

現代では、テレビをはじめとした、世界を瞬時に結ぶことのできる情報メ

ディアが浸透していて、世界中が同時代的に生きている。しかし、博物館の巧妙な演出で、ふるい時代へはいりこんだ錯覚を得ることはできるし、所々にふるい時代を感じさせてくれるものに出会うことも可能である。筆者の体験では意外に現代の都市のなかにそれを感じることのできるものがあった。オランダは、アムステルダムの港でのこと、古風な帆船が置いてあって、それにオランダ東インド会社のマーク（以前、なんどか江戸期の伊万里焼きか有田焼きの皿にそのマークを見ていた）の入った旗がひるがえっているのをみながら、ふと、あの船にのれば、「江戸」に「長崎の出島」に帰れるのではないかと感じた。そう思いながら運河沿いのふるい建物を見ていると、3、4百年のタイムスパンは消えてしまい、屋根裏部屋からデカルトやスピノザがのぞいていはしないかと目をこらすこととともなった。

かつては、旅に出たときに、一時代も二時代もまえの生活をしているひとびとをみて、簡単にそういう異時間性は体験されるものであったろう。空間化した形でふるい時代が、博物館のような光景がひろがっていたことであろう。そういう古い時代の光景は、「浦島」のような主観的な錯覚の体験とちがって、客観的に存在する真実であり、もし時間的なものが問題にされるとしたら、まずは、こちらの方こそを取り上げるべきだということになってよい。陶潜は、「桃花源記」では、そうしている。体験としての異時間性にはふれないが、空間に定着している時代の差異については、しっかりと見ていて、秦の時代しか知らない生きた化石のような人々であることを語るのである。

3. 永遠の国（天国と地獄）

昔話において、この世界と端的に異なる世界、しかも時間のありかたが顕著に異なる世界といえば、地理的に疎隔した実在的な異世界に旅してのものとともに、実在的ではない、観念的なというか霊的というか、そういう別世界にかかわってのものがある。通常のひとが体験しやすい異時間体験は、むしろ、こちらの方であろう。これの代表は、「永遠」の「あの世」というものになる。あの世の時間は、この世界とちがって永遠か、非常にゆっくりと、我々には感知できないぐらいスローテンポで展開するものと考えられるのが普通である。

キリスト教世界での、「永遠の国へ行った花婿」のたぐいの話は、あの世の永遠であることを垣間見せてくれている。それは、結婚式の途中のことだった。花婿のまえに、死んだ友人が現れて、ほんの30分ほど、天国へとさそわれて行ってみることになった。だが、帰ってみたら、30分どころか、もう百年もこの世では経っていたという話である（『新編世界むかし話集　2ドイツ・スイス編』山室静編著　社会思想社　1981年）。

他方では、浦島に対する山幸彦の話のように、天国へいってきても、時間は、この世界の様式のままに展開するというのもある。グリムの「天国のからざお」（KHM112）によると、かぶらの種から木がはえて天までとどき、それをのぼっていった百姓は、天国にあった「つるはし」などをもって、もどってくる。が、穴におちてしまい、そのつるはしで階段をつくって地上にでられた、という話である。ここでは、天国とこの世との時間的差異などなかったかのようである。

あの世という異世界がどうなっているかだが、生きている者たちは、ふつうには行きたくはないところだし、行ったものは、生身のままでは帰ってこないから、確実なところは、不明である。だが、多くのひとの経験するひとつのことから推量すると、おそらくは、永遠か、時間はごくゆっくりと展開しているということになりそうである。

それは、生者は行ってくることは困難だが、死者はあの世からしばしばこの世界へと生者に逢いにもどってくるという我々の体験、つまり夢の出来事において、これを感じることができるのである。夢に死者はときどき出てくるわけだが、死んでから何年たっても年をとらない。夢は、自由な想像の世界のできごとではない。古くは、おそらく、もうひとつの現実だった。いまでも不吉な夢を見たら、それは単なる夢空事としておけず、現実的な気がかりをいだくことがある。かつては、もっと夢は尊重されていて、お金を貸し

た夢をみたら、返却期日には、ちゃんと返してもらいにいき、相手もそのことに「そうだったのか」と応じるようなことがあった（かしこい人は、「わしは、きのうの夢でちゃんと返した、忘れたのか」と応じた）。そういう現実的な夢に、死者は永遠に変わらない姿で、あの世にいったときの若さのままで現れてくるのである。ということであれば、あの世では、時間的展開はないか、きわめてゆっくりしていると推量されるわけであろう。

あの世の存在と、そこでの時間のこの世と異なることは、かなり本気でそう思われていたもののようである。よぼよぼになって死んだ者は、あの世に生まれ変わってもよぼよぼで苦しみつづけながら夢に帰ってくるので、元気で再生するためには、元気なうちに死のうというようなことがあったようである。今と違って、老人になっての「自然死」はよいことではなく、若い元気な姿のままでの死が求められたということである。元気では死ねなかったとしても元気な格好をさせてあの世に送りだすようなことが、つまりは、死体を勇者らしく葬送することにして、わざわざ、死体に弓矢をつきさして葬るようなことがあったともいう。この埋葬法は、理にかなった、思いやりのある方法である。そういう屍体を見たものは、勇ましい戦士の姿で死者が夢に現れてくるのを見ることになるからである。逆に、いくら愛しく美しい恋人の死であっても、その人が事故で顔面をえぐりとられていたり、いざなぎの妻いざなみのように腐乱死体になっているのを見て最期とした場合には、そういう姿であの世で過ごしていることを知らせに恋人は帰ってくるはずである。

ところで、永遠か、ごくゆっくりとした時間というあり方は、天国とか極楽浄土のみではなく、地獄もまたそうである。悪人はこの世への執着が強くて長生きで、周囲の願望に反してなかなか地獄へいかないものだが、それでも寿命が尽きれば地獄へ直行する。そのような身近な悪人たちも、みんな、永遠に不変のすがたをして、地獄からよみがえり、生者の夢のなかに現われてくるのである。

ただし、体験される事実は、正確には、「あの世の永遠」ではなく、死者が夢では年とらないままだということであり、あの世が確実に永遠だというわけではない。死者についての記憶が死ぬときでストップしているから、夢の材料としては、そのときよりも以前のものしかつかえないから年とらないことになっているにすぎないといえば、身も蓋もないことになるが、そういうことが真実なのであろう。

とすれば、先のグリムの話のように、天国もこの世も時間的な展開について、異なることをふまえるにはおよばないという話になっても、それはそれで、通用することになる。この世との行き来をいう話であれば、時間的な差異のはいらない方がわかりやすい面もあるわけで、天国が雲のうえにある程度の遠さの、身近な世界とみなされてよいのである。

夢の世界は、もうひとつの感覚的現実であり、想像力による空想の架空世界とちがって、確かな異世界になっていた。だが、そこでの時間的展開は、因果関係を逆転したり支離滅裂であったりもするし、ときには永遠であったりと多様である。そういう夢の時間のなかに死者はよみがえるのであれば、ときには、死んだ時の姿ではなく、それよりずっと前の幼児姿に帰ったりもする。しかし、すくなくとも、地獄に行ってから以後に年をとって変貌するというようなことはない。そのことだけは確かである。直接的な体験としてあるのは、単に（記憶印象の更新がないから）死者は年とらないということである。しかし、それから一歩すすめて、かりにあの世があるとしたら、その不変のままの死者ということからの素直な判断として、あの世は永遠ということが出てきてもよい。

結婚式の途中で死んで、100年して戻ってきたというのは、すこし大げさだとしても、死んで30年ぐらいたって、花嫁の夢の中に帰ってきたとしたら、その花婿は、たしかに、30年まえの若さのままで現れることであろう。おばあさんになりつつある花嫁は、まるでわが息子のような花婿に再会するのだから、「すこしも歳とっていない」「あのときと全然変わってない」と仰天し、天国の無時間性・永遠性を感じることになろう。自分の30年の時間と、花婿の30年前のままのギャップに、時間展開の奇怪なことを感じさせられること

になる。こういう体験は、ごくふつうのことであって、でたらめな作り話ではない。むしろ、その花婿が、同じように歳とって帰ってきたとしたら、それこそがでたらめな作り話だといわれねばならない。体験に見合う、つまり真実の話は、やはり、永遠の天国や地獄へいった者は、歳とることなく、永遠に若いままで（夢のなかに）帰ってくるということである。

4. 結び（長旅と夢、ふたつの体験の比較）

以上、異世界にかかわっての異時間体験を二種類見てきた。ひとつは、故郷を長く離れていて帰郷時に感じるそれであり、もうひとつは、夢に出てくる死者の歳とらないことからするそれである。前者は、自身の（故郷についての）時間展開がないのに、故郷の方は勝手に時間を展開していて、きのうはこどもだったのに、今日はもうおとなになってと、急激な時間展開を感じさせられるものとなる。自分の時間展開は、故郷に関しては、1、2日しか経っていないのに、故郷そのものは、5年も10年も経っているという時間展開のギャップである。つまり、竜宮城や、孤島にすごしたのは、故郷を離れて1、2日なのに、帰ってみたら、10年もの年月が流れていたということである。

これに対して、夢に死者が帰ってくる場合には、死者の世界が永遠と感じられるものになる。この世にいる自分は、死者のなくなった日から数えて、30年たって30歳としとっているのに、夢に帰ってきた死者は、まるで時間がない永遠の国にいるかのように、全然としとらずに30年前のままであらわれるのである。この世では、30年経っているのに、あの世では、まるで時間が経っておらず、結婚式のときに花婿姿で死んだのが、せいぜい着替えをして普段着であらわれるぐらいのことであるから、この30年は、結婚式を終えるか着替えをしたのみの、2、3日とか、ほんの30分ぐらいの時間しか経っていないという感じになろう。

浦島的な異時間性の方は、現実に遠くにいって帰郷して感じることのできる、長旅をしての現実的な異常時間の体験が背景になっている。あの世の永遠の方は、夢のなかでのそれは、夢をみている当人自体が異常な時間を担っているわけではない。自身はこの世（の夢のなか）にありながら、あの世にいった身近な人が30年前の姿であらわれるのをみて、その身近な人が時間異常を体現していることを見い出すのであり、自分達の時間展開とあまりにも異なっていることに驚かされるのである。

浦島体験では、何年か前の記憶の世界（故郷）を即現在につなげて自身が異常な世界になげこまれる体験をするのだが、夢の場合、自身は過去から現在にと普通の時間展開をしているこの世界にありながら、記憶のなかにある一点だけが現在のなかに混入して（夢のなかに）あらわれるのである。夢では、自身とその世界は通常のありかたをとりつづけているのであり、驚くのは、そこに現れた、時間がないかのような死者の変わらない昔のままの姿に対してである。だが、浦島の場合、自分の置かれている世界そのものが異常な時間展開をしていると感じられるのである。特に異常な時間感覚をおぼえるのは、故郷に帰った時である。故郷そのものの時間展開の急激さに、そして、それに見合う自己のその場での急激な加齢に、時間の異常さが体験されるのである。自身が異常な時間のなかにまきこまれ、自己の存立の場そのものが異常に奇怪にゆらいでいることを感じ、同時にその時空間に支えられて存立している自己そのものの激変も感じさせられるのである。夢の場合は、もともと支離滅裂なところがあるが、死者が現れたからといって特別に自分の時間や存在がゆらいでいくことにはならないし、夢を支える現実的な自己は、変わらずに維持されている。

夢の方では、異世界としての地獄や天国そのものが異常な時間つまり永遠のあり方をしているということになる。これに対して、浦島の場合、竜宮などの異世界そのものは、直接的には、この世界と同様の時間展開をしているはずである。乙姫さまとの時間は、あっという間かもしれないが、それは、この世界の現実でも同様であって、楽しく充実しているときは、あっという間に終わってしまうものである。退屈していたり、苦しいときの時間展開がゆっくりしているのは竜宮でも故郷の地でも同じことである。ただ、故郷に

帰って異常な時間体験をしてみて、振り返ってはじめて、竜宮の異世界が時間的にこの世界と異なっていたのだと（感じられるものではなく）解釈されるのである。10年故郷を離れていて帰郷した場合、10年前は「きのう」のような感じだから、自身は1日経っているだけと感じているのに、目の前の故郷の時間は10年も進んでいて仰天するのである。そして、振り返って旅先の竜宮などの異世界について（そこにいたときには、10年たっていることを感じていたはずだが）、旅立ったのは「きのうのような」感じであり、そこにいたのは「本当は1日だったのか、夢みたいだ」と解釈しなおして、異世界にいた時間を1日と捉えなおすのである。

浦島体験の場合、異世界とこの世界の時間関係は、基本的には、旅の長さ分が異世界の1日となるはずである。10年故郷を離れていたものは、帰郷時に、きのうは赤ちゃんだったのに、今日はもう10才の子供になっているのを見る。つまりは、異世界の方には1、2日しかいなかったのにこの世界（故郷）では10年も経っているという勘定になるから、異世界の1日はこの世界の10年に等しい、となるわけである。浦島が竜宮に三月、あるいは三年いたのに、故郷では、三百年経っていたというのは、そういう勘定からいうと、けっして誇張ではなく、むしろ控え目な数字になっているというべきである。

夢の方では、基本的には、一律に、あの世は、天国・地獄を問わず、永遠となるのではないか。死者の記憶は、死んだ日をもって停止する。以後、どんな死者であっても、少しも歳とることがなく、永遠に不変であり、いつまでも生前の姿のままであらわれるであろうからである。

仏教などでは、地獄や極楽浄土を多様に展開して、それらの時間展開を、一律に永遠ではなく、このわれわれ人間世界に比して上層の天に向うほど下位層の何倍ものゆっくりした時間展開をするものと捉えている。地獄の方も、一層下位にむかうほどに、苦しみを長く味わうようにと配慮してであろう、何倍ものゆっくりとした時間展開をすると考えている。この現実の人間界に（夢を通して）帰ってくる死者は、常に不変で歳とらない。記憶更新のない点からいって、時間を超越しているのであり、時間展開が一切ないものとして「永遠」というのが真実のはずである。だが、その夢体験の事実をふまえながらも、想像力に富むかつてのひとびとは、一律にあの世が永遠では、この世での善や悪のむくいを、その善悪の大きさに応じてあの世でうけるという配慮に欠ける点で不都合なので、それを考慮し、浦島体験の方を混入したのであろう。浦島体験の時間的な展開が各自の旅が5年や10年に応じて、1日が5年になったり、10年にとちがうことをふまえて、より大きな善のむくいにはより高く長い楽土を用意し、よりおおきな悪には、より厳しく長い苦しみの体験をしてもらおうと、一律に永遠ではなく、この世からいうと永遠にも思える長い時間ではあるが、これらに差異を設けたのではないかと思われる。

Time feeling in the fairy-tale "Urashima Taro"

Yoshiki KONDO

The fairy-tale in many countries has the tale of strange time experience. The most famous tale of this type in Japan is "Urashima Taro". He went to Ryugu-palace and stayed only two months. But when he returned to his country, he could not find his home and acquaintance. At last he knew that his stay in Ryugu was not two months but two hundred years.

We have occasionally really such experience as the following. When we traveled for a long time, the memory concerning our country interrupts at that starting time. And when we came back, for example five years after, we connect directly the homecoming time with that preceding fresh memory of five years before. Then our baby who was yesterday one year old in home at starting time of travel, becomes today suddenly six year old child.

We feel that our travel might be only two days' travel, yesterday we started and today come back, nevertheless at the same time it was the five years progress of our country's time too. And so we must guess that one day in foreign country where we traveled is equal with five years in our country. Urashima's experience is exaggerated but is not fiction.